

シンプルに時間停止してJKをハメ殺す話

neonn

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りです。

いつも通り、行間は想像で補ってください。

目次

話	——	1
話	——	8
話	——	18

シンプルに時間停止してJKをハメ殺す話

平日の朝、自転車を漕ぐミニスカJKが太腿をチラチラさせながら走っている。

ふと、時間停止できたら太腿のその先まで自由に弄ることができるのではないかと考えた。

念じてみる。

すると、ゆっくりと周りの風景が止まっていった。

雑草や木々すら微塵も風に揺られずに、完全に静止している。

車や——自転車に乗ったJKも——歩行者すら、動きを不自然な体勢で止めている。

(だが物理法則に反することはなさそうだ)

原理はよく分からないが、さっそく自転車に乗ったJKのもとへ向かう。

自転車に乗ったJK——少女A——は、太腿や胸を触られても微動だにしない。

感触はとても柔らかい。

清楚なショートボブと真面目な顔立ちに不釣り合いな、大きな臀部とふくよかな胸が魅力的だ。

自転車のサドルにむっちりに乗った尻を、スカートを両手で持ち上げたままじろじろと眺めた。

白地に薄い青の水玉模様という子供っぽい柄も、どこか背徳感を感じさせる。

オマ○コをパンツ越しに抓ったり撫でたり押したりしていると、濡れてきた。

(時間停止しているのにこうして濡れるのが不思議であつたが、気にしない)

そのまま続けていると、少女Aの身体がビクンと跳ねた。

オマ○コがきん、で、パンツがジワジワと湿り気を帯びている。

頃合いなので、少女Aを自転車から引き離して服を丁寧に外していった。

少女Aの姿勢を、尻を高く掲げるような四つん這いにした。

オマ○コは少しだけ不揃いな短い陰毛が生えていたが、形が良い。

(あまり自慰をしないのだろうか)

この姿勢だと、大きな乳房が重力でだらしなく揺れる様子が見て取れる。

(できれば自立させたかった。不器用なので無理だった)

おっぱいがゆさゆさと揺れて、一瞬地面に先端が触れてしまったのかピクリと一瞬反応する。

まるで、乳房が自身の大きさと乳首の高い感度をアピールするかのような光景である。

きっと本人は不本意に違いない。

自分の乳房が大きく、だらしないこと。

自分の乳首が敏感で、すぐ感じてしまうこと。

これを見知らぬ男に知られてしまっているのだ。

そして、小さなオマ○コが蜜を湛えて子作り行為をするのに最適な位置で無防備に晒されている。

お尻の穴は固く閉ざされているが、軽く揉み解してやると指2本を軽く飲み込んだ。

腸内は温かく、腔腔の方を刺激するとオマ○コからトロトロと愛液が垂れてくる。

奥には硬いものがある。

(まさか現役JKの排便前のウンチを直で触る日が来るとは思わなかった)

興奮のあまり、うっかり射精しそうになったので、左手でチ○ポの先をオマ○コに押し当てる。

・
・
・
・
・

地面に、ボトボトと精液が零れ落ちる。

少女Aのあまりに狭い膈内に、ほとんど入りきらず零れてしまったようだ。

それでも十分妊娠する可能性はある。

避妊するためにも、掻き出してあげないといけない。

アナルに突っ込んだ右手の指を引き抜き、オマ○コへ向かって沿わせてゆく。

やや白い液が混じった少女Aのオマ○コを、左右に広げてゆく。

陰唇の内側は、まさに淡いピンク色だ。

尿道もヴァギナもクリトリスも、教科書に載せても良いくらい分かりやすく見えてい
る。

また興奮して、ペニスを押し当ててヴァギナと尿道口がぴったり合うようにしてか
ら、射精した。

・
・
・
・
・

今度は上手く膈内へ流れたのか、あまり精液が零れてこない。

ペニスを離すと、ビュツ！と精液が（わずかに）出た。

これでは確実に妊娠してしまうと思ひ、人差し指をヴァギナへ押し込んでいった。

ゆっくりとゆっくりと、ニユルニユルの肉壁を掻き分けていくと、壁にあたった。おそらく処女膜だろう。力を込めると、一気に指の根本付近まで入ってしまった。指をゆっくりと、円を描くように動かす。

こうして膣奥の柔らかな壁を撫でていると、次第に少女Aの腰がガクガクと動くようになった。

これがボルチオだろうか。

尿道がヒクヒクしたかと思うと、勢いよく小便がジョーツツと漏れた。

地面に叩きつけるように迸るオシッコと共に、膣が強く締め付けてきた。

数回、巨乳をバルンバルンと地面に擦り付けながら痙攣したかと思うと、ブツ！と短い屁が出た。

（少女Aが、もしも他人の前でボルチオアクメと同時に屁をこいたことを知ったらどういふ顔をするだろうか）

指をずるつと引き抜くと、血や精液やヌラヌラとした体液が糸を引いていた。

尻穴にその指を突っ込むと、ウンコが手前まで来ているのが分かった。

どうしてもウンコを漏らすJKが見たかったので、フィストファックすることにした。

少女Aのおマ○コから滴る液で拳を湿らせて、回し入れていった。

なかなか入らないので、力任せに突っ込んだら手首付近まで入った。温かい膣内を指5本で感じつつ、触手のように動かす。

少女Aは、ガクガクと痙攣して、ひどく汗をかいていた。

子宮口と思しき穴を指でこじ開けようとしているうちに、急に膣の締め付けが弱くなった。

すると、ぽつかりとアナルが開いてウンコの頭が見えた。

手を引き抜いて、様子を見守る。

すると、ジョワ〜とおしっこが漏れると同時にニユルニユルつと大便が出てきた。

スマホで録画しながら、硬い先端のウンコが徐々に軟便に変化していくのを観察した。

最後の方は、ほぼ液状便で酷い臭いがした。

ピツ…ピピっ…とわずかに汚物をアナルから絞り出して、5分ほどの排泄が終わった。

そこには、全裸でうつぶせの状態の悪臭を放つ少女Aの死体があった。

仰向けにすると、腹を見せる犬のようなみつもない恰好になった。

その上に体をかぶせていく。

真つ青な顔の少女Aの唇に舌を突っ込みつつ、勃起したチ○ポで膣内を蹂躪した。乳首を引きちぎるくらい乱暴にし、柔らかな唇を何度も舌で嘗め回した。

何度も腰を叩きつけて、もう子供を産めないであろう子宮に向けて射精した。

・
・
・

・
・

・
・

さんざん楽しんだので、あとは撤収する。

少女Aとその私物は持ち帰って、オカズにしよう。

そうして、全て終わった後に時間が再び流れ始める。

一瞬で姿を消した少女Aがいなくなったことに、誰も気付くことは無い。

END

シンプルに時間停止してJKをハメ殺す話 2

最近あまり性欲が無い。

体力は無駄に余っているが、珍しく性欲があまり無かった。

男は暇だった。

お盆の連休中は、バイトも無い。

家事も大して多くない。

あまりに暇だったので、最寄りの駅から市内に向かった。

最近は同人誌などに触れていない。

せっかくなので、とらの×なあたりでコミケの新刊でも見ようかと考えていた。

改札を抜けて、やや平日昼間にしては人が多い構内を歩いて行った。

あまり目ぼしい女子校生もいない。

内心大きなため息をつきながら、ホームに止まっている車両に乗り込んだ。

長い座席の真ん中にドカツと腰を下ろす。

知らない他人が嫌いなので、公共交通機関も然りである。

さつさと着けばいいな、と思いつながら目を床に落としていると隣に誰かが座つてきた。

——大して混んでもいないのに、わざわざ俺みたいな奴の隣に誰だ…？

脇目には、どうも制服を着た女子校生であることが分かった。

そして、いつの間にか座席が全て埋まっているのに気が付いた。

どうやら、この女子校生は仕方なく俺の隣に座っているようだ。

別にラケットだとか楽器ケースだとか、そういう大きな荷物を抱えている訳でもない。

股下に置いた可愛らしいバッグ、筋肉を感じさせないふわふわもちもちとしていそうなふともも、非常に短いチェック柄のプリーツスカート、ややサイズが大きめの真っ白な半袖のワイシャツ、若干透けたキャミソール、スマホを操作するのに連動して最小限に動く細いひじ、視界の端に見え隠れするサラサラの髪の毛、ほんの少し沈む座席から伝わる体温。

だが、俺はあまり期待していなかった。

何を？ 勿論顔である。

どうせ、こういう時はブスなのだ。

恐る恐る、向かいの窓に反射して映っているであろう隣の女子校生の顔を覗く。

すると、俺は勃起した。

小さな顔のパーツは、見事に「可愛い」と言わざるを得ない品質と配置とを満たしていた。

ブスどころか、むしろ遠目から見るだけで十分オナネタになり得るレベルの美少女だった。

ああ、これが因果だ。

決して、このまま逃がすまい。

そう念じると、徐々に世界は止まって見えた。

とりあえず、前回の自転車に乗った女子校生の話をしよう。

実は、あの後その女子校生に関して周りの反応を見ていた所、あることに気が付いた。時間停止中に起きた不可逆的なことは、まるで「既にそうであった」かのように過去
改変されるのだ。

例えば、女子校生の死。

これは完全に交通事故で亡くなったことにされていた。

皮肉にも、ちょうど俺が襲った場所で死亡したことにされているらしく、花などが手
向けられていた。

何故死体や骨が無いのかを疑問に思う者がいてもおかしく無かった筈だが、それも不思議な力でどうにかなくなってしまったようだ。全く不思議である。

さて、つまり。

ここで隣に座っている女子校生を殺してしまえば、既に死んでいたことになる。

だが、今回はそうしない。

今回は、孕ませる。確実に受精するまで、（停止した時間の中で）1か月にわたる種付けを行う。

そして、殺さない。

これは賭けである。

下手すると、ただのレイプ魔などにされてしまうかもしれない。

だが、上手く行けば「予め肉体関係を持っていた」ことになるかもしれない。

まあ賭けと言っても、万が一の時は再度時間を止めて、証拠を全て破壊してしまえば良い。

——これで、念願の女子校生のセフレが出来る。それも美少女の。

そんな期待を胸に、俺は優しく隣の女子校生の衣服を丁寧に脱がしていった。

とは言っても、せつかくの制服JKなのでほぼ着衣状態である。

胸はボタンを外し、ブラを上にとずらしただけで、パンティもそのまま穿かしている。スマホは止めてもらい、変わりに両手を広げた状態にした。

まずは、唇を重ねる。

柔らかい感触が伝わる。

もちもちとした女子校生の顔に、腹を空かせた駄犬のようにハフハフとむしゃぶりつく。

唇のスキマから、舌を差し込む。

非常にヌメツとした口腔内の感触に、思わず射精しそうになった。

舌で口内を蹂躪し、何度も喉奥に差し込んで女子校生の喉奥の粘膜を削り取った。

そろそろ勃起し切ったチンポが、射精へのカウントダウンを始める時だ。

薄い生地のパンティに、股間に沈み込ませるようにした指を引つ掛けて引つ張り、ずらした。

じつとりと濡れた股間に、ギトギトになったペニスを押し当てる。

ゆつくりと、腰を進めると亀頭が暖かい膣肉に侵入していった。

軽い障壁があるが、あまり気にせず突き破った。血が滲んでいる。

そして、ペニスがすっかり根本まで入ったころには射精感は限界を迎えていた。

女子校生のたわわなおっぱいの先端で剥き出しになった乳首を摘みつつ、一方的なディープキスをしながら膣奥で射精した。

電車内。

誰も微動だにしない空間にて。

制服を身に纏い、女子校生であると誰が見ても明らかな美少女に、白昼堂々生殖行為を行ってしまった。

5分ほど、ペニスを挿入したまま俺は女子校生に抱き着いていた。

ふにふにと女子校生の柔らかい脚を揉むと、まるで脂肪しかないかのような感覚に陥る。

背中も、腕も、どこも必ず柔らかい脂肪が覆っていた。

だが、——これは後で直立させた状態で性行為して分かったことだが——スタイル自体は悪くない。

小さくて脂肪が多めでも、腰はしっかりと大きく、手足も程よい長さで、まるで発育の良い女子小学生のような感じのスタイルなのだ。

一方、顔はややおとなしめであり、あまりエネルギーギツシユさや、気の強さなどは感じられなかったが、微妙にキリつとした表情をしている所がまた可愛らしい。

小学生のような無垢さよりも、意志の強さを感じる顔つきである。

——だが、延々と男に種付けを行われている少女に意志などある筈もなかった。
ただ、男が飽きるまで。

男に触れられている時だけ生理現象が進行するその少女は、時折小便や大便を急に漏らしたり、セックス三昧の末、無意識のうちに喘ぎ声を出したり、男が射精したそれや、小便を喉を鳴らして飲み干したり、とても近寄りがたいはずの現代の女子校生が見知らぬ男相手にしないようなことをどンドン解禁していった。

——そして、一か月後。

最低限の清掃を行い、小綺麗に制服に付着したあれこれを洗濯された少女を座席に座らせ、男も隣に座る。

妊娠検査薬で、一応妊娠を確認した。

あとは、時間を動かすだけ。

——さて、どうなるか。

やや不安げに、男は時間を動かした。

「——ねえ、○○○?」

——……?」

「あのさ、とらの×なによるついでに寄りたいたい所なんだけど」

——ああ、これは。

「ちよつと、聞いているの？」

——成功だ。

「ねえ、○○つてば。シカトしないでよ」

『詩織』

「……? どうしたの？」

『いや、名前を読んでみただけ』

「意味わかんない。何それ」

『どっか寄るんでしょ? 起こしてね』

「え? ちよつとお! ○○!」

内心、思ってたよりコイツ煩いな、と思いつつ、今後の展望に思いを馳せていた。

『そこ多目的トイレだからさ』

「……嫌だよー? マジで」

『そう?』

「……。」

『ノーパンのくせに?』

「……!? な、な、なんでバレッ……//」

『そりゃ階段でそのスカートじゃ見えるでしょ』

「え? じゃ、じゃあ……」

『大丈夫、隠してたから』

「あ、そう……つてそういう問題じゃないのー!」

『良いから、俺は詩織のそういう所が好きなんだし』

「くう……」

『だから、多目的トイレ行こうって。ちよつとだけさ』

「……うう〜」

完全に上手いことセフレどころか恋人みたいな感じになったが、案外悪くない。

まず、締めまりが良い。

そして、俺を恋人だと思っっているお陰でとても良い声を上げる。

また、時間停止中にした行為が刷り込まれているのか、スカートロや汚物処理も喜んでしてくれる。

流星に妊婦に小便を飲ませたりはしないが。

だから、必ず一緒に出掛ける時は、トイレに行くついでに何かしらやるのが日課に

なっていた。

甘酸っぱい香りのする女子校生と腕を組みながら、堂々とトイレに入り、普通人には見せない脱糞を見せつけさせたり、声を抑えずに獣のような声を上げて本気の種付けセックスをしたり、好き放題やっていた。

これで周りから何も言われないのも、例の不思議な作用によるものなのだろう。

「あゝ……しゅっ……いい……おゝッ……!!!」

今日は、膣内にペニスを挿入したまま微動だにせず、互いの拍動だけで性感を高めるという非常にソフトなプレイだが、詩織はさつきから酷い深いキをキメて柔らかい尻肉をブルブルと震えさせている。

膣肉のうねる感触を楽しみながら、しばらくはこのままで良いかと考える男なのであった。

END

シンプルに時間停止してJKをハメ殺す話 3 「近所の女子校生」編

——相良 萌希（さがら・もえぎ）。

ここ最近、俺がマークしている子の名前だ。

と言つても、実の所は萌希と元より知り合ひであつた。

近所の付き合ひで、——タダ働きのなので渋々——宿題を代行するよう勉強を教えるよ
う言われて出会つた、当時は中学生二年生のややや大人しい少女こそが、相良萌希だつた。

当時は、ちよつとムツチリしてるなあ程度であつた。

だが、萌希の大人しい雰囲気に対して、妙に近い距離感や、芋っぽくもあり、ぼんやりとしていて掴みどころの無い性格などが妙に気にかかつた。

そして、次第に女性らしさを増していく身体。

小柄な身長に反して、はち切れんばかりに大きくなつた胸が目立つてきた頃にはどこか居心地が悪そうな態度を取られ、そのうち会話が減つてしまつた。

今は、会つてもほとんど会話はおろか挨拶もせず、通り過ぎられるだけである。

——エロい顔つきで巨乳ばかり見ていたからだ！と思つた奴……!!!制裁……!!!

という訳で、俺は時間停止を使って気になるあのコをブチ犯そう！と思ひ立つたわけだ。

——本当にクソ野郎である。

さて、時間停止も色々試行錯誤を重ね、女子校を強襲してトイレ中の女子校生をモルモットにしてある技術を生み出した。

デメリットである脳への後遺症が玉に瑕だが、まあ男を誘う爆乳をぶら下げている方が悪いんだから気にしない気にしない。

説明すると、要は脳以外の肉体の時間だけが流れるようにする、というもの。

実は、今までは無意識のうちに使えていたが（電車内の女子校生を妊娠させられたのも、その恩恵）意図して使うまでには色々と苦労があった。——が、今はどうでも良い。ともかく、脳以外の肉体が時間停止しないことで、今までマグロ状態だった女の子がちゃんとイくようになる。

——我ながら、なんて大躍進だ！

使用直後だけ、何故かIQというか、知的能力が尋常じゃなく下がるが。別に良いっちゃ良いのだ。俺は困らないし、どうせ数時間すれば元に戻る。

むしろ、嫌われた女子への仕打ちとしては丁度良いくらいだろう。

嫌いな男に犯されたあげく、ヨダレを垂らしながら脱糞失禁しているなんて素晴らしく無様じゃないか。

萌希が確実に帰宅した時間を見計らう。

そして、いつものように時間を止める。

最初から全裸&裸足で、ドコドコと萌希の部屋に入ると、ちょうど机に座っている所だった。

——いや、ただ座っている訳じゃあない。勉強しているんだ。馬鹿か俺は)

まあ、立てば芍薬座れば牡丹なんて言うが、普通にイスに座って前かがみになって勉強しているですら強調される火薬玉のような爆乳で、胸のボタンが張り裂けそうになっているのは、まさに壮観だ。

後ろに立ち、大きな乳房を持ち上げるように両手を脇の下から差し込む。

——重い。

少々重すぎないだろうか。

しかも、見た目より乳房のあたりがパツパツである。

見た目が既にパツパツだが、どうやらブラで乳房を無理やり押さえつけているらしい。

——苦しいだろう、辛いだろう。

そう思い、丁寧に制服のボタンを外してあげた。

——と言うか、家でも制服を脱がないとは真面目なのか物ぐさなのか……。

ともかく、ブラだけにすると、とても大きな肉塊が、一般的に見れば大きいであろうブラに強引に押しえつけられている様子が観察できる。

俺は適当に萌希の背中に手を突っ込み、ブラのホックを外すと同時にパツツ！とブラが吹き飛んだ。

非常に大きな乳房が、ややブラで押しえつけられた所に跡が残っているものの、綺麗な形をしてそびえ立っていた。

そして、惜しげもなく大気に晒される乳頭。

押しえつけられたせいで、左の乳首だけが陥没している。

右はピンと尖って勃起しているあたり、自慰では右ばかり弄っているのだろうか？

ここで、萌希の肉体時間だけを元に戻す。

そして、両方の乳首を後ろからコリコリと弄ると、急激に左乳首も硬くなり、ピン！と勃起した。

数10分飽きもせず、現役女子校生の爆乳乳首を好き勝手触っていると、身体全体が僅かに震えつつあるのが分かった。

膝丈くらいのスカートを無造作にめくると、じつとりと股間の辺りが滑り気を帯びた体液で濡れていた。

スカートをめくった瞬間、ムワツと湯気が立ち、周辺にキツイ臭気が充満した。

若干漏らしているようで、いつの間にか白いソックスが黄色く汚れていたし、アンモニア臭も感じた。

その間も、延々と乳首に刺激を与え続ける。

脳は活動していないはずだが、息は荒く、口の端からヨダレが零れ落ちている。

既に女子校生が人前ですべきではない恰好ではあるが、まだこれからである。

俺は、おもむろにチンポを萌希の髪の毛に擦りつけた。

女子校生がいつも当たり前のように、綺麗に整えている大切な艶やかなそれは、瞬間に俺を絶頂へと導いた。

射精の瞬間、亀頭を思い切り萌希の頭皮に押し付けた。

元気な若い毛根に、汚い精子が浸透していく（かどうかは分からない）のが、実に無様である。

また、萌希の口腔内に未だに勃起した陰茎を遠慮なく奥まで突っ込む。

鼻をふさぐと、呼吸の為に口で一生懸命に陰茎に吸い付こうとしてしまっている。

鼻から手を離すと、陰毛に鼻を押し当てられつつもフーツ！フーツ！と鼻で呼吸している。

酷い性臭を嗅がされようが、陰毛が顔にこびり付こうが、気にしない様子が可愛らしい。

頭部ごと左右に揺する様にして、喉の奥を刺激し、無理やり嚙下させるようにすると汚い声でむせる。

そのまま射精し、陰茎を差し込んだままにしていると目を白黒させながら鼻から精液を流し、凄じバキュームで吸い付いてきた。

流石にまだ死なれると勿体ないので、ゴポ！と勢いよく陰茎を引き抜くと、精液以外にも白米などが混ざった吐瀉物を吐き出した。

無表情でこんな様子で粗相をするので、不気味である。

吐瀉物で色々汚れたのと、ムカついたのとでビリビリと萌希の着ている服を引き裂き、全裸にした。

牛のような乳房に、やや肉付きの良い手足。お腹はとても触り心地が良いし、腹部は感度も高いらしく触っていると愛液が垂れ流されていた。

全身好き放題触りまくること数10分。

萌希の性器がドロドロになり、少し触れるたびに四肢が動くので、ペニスを突っ込んでみた。

胎内は熱く、すぐに射精した。

しばらくムチムチ女子校生型タッチワイフ（アクメ機能付き）で膣内射精を楽しんでいた。

ややゲロ臭いが、ディープキスすると舌を絡め返してくるのがとても素晴らしい。

やはり淫乱な肉体はそれ自体が淫乱を望むのだな、と納得した。

終盤は、騎乗位にしてやると、小刻みに腰を動かしてきたのは驚いた。

ただ、勝手にイっては腰を振るの繰り返しで全然気持ちよくないので、思い切り腰を振ってやるとビックリしたように腰を逸らせていくのである。

久々にペニスを引き抜くと、ブツ！と汚い音を鳴らして精子が逆流してきた。

尻穴にも何回か射精したが、萌希の場合は膣の方が熱く優しい締め付けと、強い抱擁のような締め付けが楽しめるのでほとんど膣内に射精してしまった。

まあ体感では数時間だが、わざと危険日に押し掛けたので確実に孕むことになるだろうなどと考えていた。

萌希は、ベッドの上で全裸で脚をおっぴろげている。

時間停止を解除した。

天井裏に潜み、しばらく様子を観察することにした。

野太い声を上げながらガシガシと自慰する萌希。

仰向けに潰れたカエルのような体勢で、腰を何度も弓なりに逸らせては大量の失禁を迸らせている。

そして、うつ伏せになり、腰を高く上げて腰を振りながらガシガシと自慰し始めた。尻穴から、太い大便がモコモコと伸びては、ベッドにボトリと落ちていく。

かと思えば、急に凄い勢いでブリブリと4、50センチはあろうかというような長い大便をひり出した。

大便を全て出すと、ジョロジョロと失禁した。

これを数時間、家族が夕飯を食べに来ないのを不審に思い部屋に入ってくるまで続けた。

その後、何事も無かったかのように登校する萌希の姿が見えた。

時間停止して、登校中の女子校生マンコにペニスを突っ込み、ペロチューしながら胸をはだけさせ、数分間で3発ほど直立して抱き合った姿勢のまま膣内射精し、ブラを戻し(ブラのホックは外したまま)、ワイシャツも戻し(ボタンは外れたまま)、制服のジャ

ケツトだけ閉じて、パンティに念入りに精液を塗り込み、買ってきたタンポンにも精液を塗り込み、糸を引いている膣に差し込み、喉奥にも昨晩の精液を注入し、顔中をクンクンと嗅ぎまわしてから、距離を取って、時間停止を解除した。

何事もなく歩いているように見えるが、ブラが外れて、喉や膣に異物が入っているのを感じつつ、いつも通りに振る舞おうとする健気な姿に股間を膨らませ、再び孕ませるのであった。

E
N
D